挿入構造の機能分類
－『日本語話し言葉コーパス』の模擬講演を中心に－

呉　　暁　艶

キーワード：係り受け関係、注釈、独話、自発的発話

要旨

現代日本語の挿入構造には、その機能によってどのようなものがあるかを、話し言葉コーパスを用いて考察する。その結果、A「言及内容を付け足す」、B「自身の発話に対してコメントする」、C「言及内容を修正する」、D「発話中に自分に話しかける」、E「発話中に聞き手に話しかける」、という5類があることが分かった。また、A類は、さらに4種に、B類は、さらに3種に、分類できることを明らかにした。さらに、挿入される理由、挿入構造とそれが注釈する部分との関係を考察した。

1. はじめに

話しことばは通常即興の発話であることから、話し手は何を先に言い何を後に言うかという情報の組み立てを調整しながら発話している。しかし、ときに話し手は、進行中の話を中断して、前の話について補足したり後ろの話について前置きをしたりして注釈することがある。そのような注釈部分は、進行中の発話を前後に分断することになる。そして分断された発話は、分断された前と後との間に、係り受け関係をもつ。そのように注釈的に挿入されたものを挿入構造と呼ぶ。以下の(1)のようなものである。括弧及び下線部分が挿入部分であり、挿入部分を「+」によって前後の話と分離して示す。

(1)帰ってくる時間帯っていうのが＋(<u>電車で帰ってきてたんですけれども</u>)＋塾の開始時間と一緒で　(S01M0101)

(1)では、進行中の発話は、注釈部分「電車で帰ってきてたんですけれども」によって前後に分断されている。そして、分断された「帰ってくる時間帯っていうのが」と「塾の開始時間と一緒で」が、係り受け関係によってつながっている。

このような挿入構造を考えるにあたっては、挿入構造がどこを注釈するのか、また、何のために注釈するのかという2つの点が重要な問題となる。これまでの研究に

おいては、前者を問題とするものは、挿入部分がどこを注釈するかの分析にとどまり、何のために注釈するかという面の分析は不十分である。また、後者を問題とするものは、対象とする挿入構造を特殊な位置に現れるものにかぎっており、それ以外の位置に現れる挿入構造を検討していない。さらに、以上の2点以外の問題を考えるにあたって、挿入構造の分類を提示している研究もあるが、それは、典型的な挿入構造をとりあげるにとどまり、挿入構造の機能面の分析は十分ではない。つまり、挿入構造に機能的にどのような種類があるのかという点は、さらに考えていく必要があると考えられる。そこで本稿では、機能的な面から見たとき、挿入構造にはどのようなものがあるのか、分類していくことにする。

2. 先行研究

まず、挿入構造の分類に関する先行研究を概観し、その問題点を示す。

挿入部分がどこを注釈するかという観点による分類に、丸山岳彦他(2004)と丸山岳彦(2014)がある。挿入構造を、①発話全体の背景や前提となる情報を表す、②直前に発話した語や内容について注釈を加える、③今から発話しようとする語や内容についてあらかじめ注釈を加える、という3類に分類している。

(2)色んなパターンを＋(ここに書いてある数字は頻度ですが)＋たくさん集め

(3)一つは(Fえ)全体四つから五つの班＋(パーティーと言いますが)＋パーティーに分けられて、各パーティーごとに行動を取ります

(4)お酒と＋(メニューは少ないんですが)＋食事が置いてあります

(丸山他(2004)より、表記を一部変更。Fはフィラーを意味する。)

(2)は①の例であり、発話の全体「色んなパターンを」「たくさん集め」の背景や前提となる情報を表すものである。(3)は②の例であり、直前に発話した「班」について注釈を加えるものである。(4)は③の例であり、今から発話しようとする「食事」についてあらかじめ注釈を加えるものである。しかし、これらの研究は、どこを注釈するかの分析にとどまり、何のために注釈するかを分析していない。

これに対して、挿入部分が何のために注釈するかという観点による分類に、舩橋瑞貴(2011)がある。これは、挿入部分が文節の途中に挿入され、一文節を形成する発話を分断するものを対象とする。次の(5)のように、一文節を形成する「言語形成期を」を「言語形成期」と「それを」に分断し、その間に「これをゼロ歳から二十歳という風にしましたが」を挿入するものである。そして、それらを「内容」「外界」「メタ」の3タイプ

に分類している。

(5)言語形成期+(これをゼロ歳から二十歳という風にしましたが)+(Fえ)それを(Fえー)標準語アクセント地域で過ごした者 (A01F0132)

(6)音調指令のタイミングと振幅比の関係+(こちらですね)+を(Fえー)モデルの拘束条件として加えた場合でも (A01M0097)

(7)三漢文訓読五は基底社会方言に基づいている小松英雄1999(Fえー)この一括弧+(読み上げるのは省略いたしますが)+(Fえー)三の一括弧に書かれていることは私(Fいー)も基本的に(Fいー)賛意を表したい (A02M0098)

(舩橋(2011)より、例の一部を削除、表記を一部変更。)

(5)は、「内容」タイプであり、話し手は、前部の「言語形成期」に関して具体的に何歳から何歳までなのかという「内容」について補足している。(6)は、「外界」タイプであり、前部の「音調指令のタイミングと振幅比の関係」という内容が、今話し手が発話の外、すなわち「外界」で指している資料の「こちら」の部分にあることを示すものである。(7)は、「メタ」タイプであり、話し手自分自身の話している内容についての「メタ」的コメントで、「三の一括弧に書かれている」内容を省略して読み上げない、とコメントしているものである。以上から、挿入構造に「内容」「外界」「メタ」という3つのタイプがあることが明らかになったが、分析対象は文節途中という特殊な位置に現れる挿入構造に限定されており、それ以外の位置に現れる挿入構造も検討する必要があるといえる。

以上の2つの観点以外にも、高梨克也・丸山岳彦(2007)は、挿入構造は何のために、なぜその位置に現れるか、を考察することを前提として、以下のような「挟み込み型」と「背景節型」という典型的な挿入構造を取り上げている。

(8)この曲線がモーメントの時間変化で右側には後頭葉に観測された+(こちらですね)+右視覚野の電流双極子と脳磁界パターンを示して (A01M0025_039)

(9)またば行表記の方は+(これは数的にま行表記の約四分の一なんですが)+文化文政化政期以降になって現われる、集中して現われる (A02F0116_063)

(高梨・丸山(2007)より、例の一部を削除、表記を一部変更。)

(8)は、挿入部分の「こちら」が、直前の「観測された」と直後の「右視覚野の電流双極子」の間の密接な関係によって挟み込まれる「挟み込み型」である。「連体修飾要素-挿入部分-被修飾名詞」という構造で、話し手は、後に続く「右視覚野の電流双極子」という内容が資料の「こちら」の場所にあることを示す。挿入部分が直前または直後の名

詞に対する連体修飾的な注釈をするものである。(9)は、挿入部分「これは数的にま行表記の約四分の一なんですが」が後続する「文化文政化政期以降になって現われる」に対して、背景的な知識や語用論的な情報を提示する「背景節型」である。「主題または副詞的要素-挿入部分-主節」という構造となり、「ば行表記の方は」「文化文政化政期以降になって現われる」という事実の背景に、「これは数的にま行表記の約四分の一」という情報があるということを示している。挿入部分が、主節に対する意味論的ないし語用論的な連用修飾をするものである。以上から、このような挿入構造には、「挟み込み型」と「背景節型」という2つの典型的なものがあることが分かった。ただし、きわめて典型的な挿入構造のみを示すにとどまり、挿入構造の機能面には十分踏み込んでいない。

さらに、以上の研究では扱われていない挿入構造もある。

(10)区役所と＋(<u>(D わ)区役所じゃない</u>)＋(F その)役所がですね遠いとこにあるとかいうなことでですね　(S03M1133)　(Dは言い淀みと意味する)

(10)では、話し手は、前部の「区役所」が間違っていたことに気づき、挿入部分で前部の「区役所」を否定して「役所」に訂正する。それにより、否定部分の「区役所じゃない」が発話を前後に分断することになる。後部の「役所」は前部の「区役所」を言い直したものであって、後部と前部が言い直しによってつながっている。このようなものは、話し言葉の修復に関する研究で言い直しとして扱われており、挿入構造の分析対象にはなってこなかったが、このような訂正に関するものも挿入構造の一種だと考えられる。

以上の研究では、挿入構造を、挿入部分がどこを注釈するかによってのみ分類していたり、また、何のために注釈するかによって分類しているものの、ある特殊な挿入構造に限定し、それ以外の挿入構造の分類を検討していないという点で問題がある。さらに、典型的な挿入構造の分類を示すにとどまっているものもある。このような点で、挿入構造の機能的な分類をすすめる余地があると考える。このようなことから、本稿では、挿入構造を、その機能によって詳しく分類していくことにする。

3. 分析データについて

本稿では、自発性が高い独話であり、挿入構造が現れやすい発話である『日本語話し言葉コーパス』(CSJ)のコア部分の模擬講演の男性データを対象とする[1]。CSJの大半は、「学会講演」と「模擬講演」の2種類の独話で構成されており、模擬講演は、おお

まかなテーマ(「人生を振り返って一番嬉しかったこと」など)をもとに話し手が内容を自由に決めているものである。なお、CSJには女性データもあるが、本稿では男性データに限定する。53ファイル(講演ファイルの番号を各例の後に示す。合計530分間以上の文字化データである。)がこれに該当する。

また、ここでの挿入構造の認定は、丸山他(2004)の認定基準に基づいて行う。丸山他(2004)では、「けど・が」「文末」末尾の挿入構造が典型的なものとされており、本稿でもそのように考えるためである。以下が挿入構造の認定基準である。

a. その前後に係り受け関係を持つ要素があること。

b. その終端で発話を区切ると、その前後の要素間の文法的・意味的な整合性が保てないこと。

c. 元の発話に対する「前置き」や「断り書き」になっており、その部分を除いても影響がないこと。

d. 挿入された部分の末尾の形式が、文末表現、または接続助詞「けれども、が」であること[2]。

具体的には次のようなものである。

(11) 僕が行ったところは+((F その)さっきも言ったんですけど)+入学した当時三百五十人ぐらいで (S02M0161)

(11)では、a. 挿入部分の前後「僕は行ったところは」「入学した当時三百五十人ぐらいで」に係り受け関係がある。b. 挿入部分終端の「けど」で発話を区切ると、「けど」の前部は、「僕が行ったところは」「さっきも言ったんですけど」となり、文法的・意味的な整合性が保たれない。c. 挿入部分の「さっきも言ったんですけど」は、元の発話「僕は行ったところは」「入学した当時三百五十人ぐらいで」に対する断り書きであり、その部分を除いても影響がない。d. 挿入部分の末尾形式が接続助詞「けど」である。

このように挿入構造を認定し、計155の挿入構造を抽出した。

4. 言及内容を付け足す(A)

まず、挿入構造には、発話内容に情報を付け足すものがある。これをA類と呼ぶ。A類は、付け足す情報が元の発話への理解に影響するかどうかによって、付加情報と不足情報に分けられる。付加情報は、聞き手にとってそれがなくても元の発話への理解に影響しないものである。それに対して、不足情報は、聞き手にとってそれがないと発話への理解に影響すると話し手が考えるものである。前者をAa「言及内容に付

加情報を付け足す」もの、後者をAb「言及内容に不足情報を付け足す」ものとする。また、付け足す情報は元の発話の言い換えであるものがある。これをAc「言及内容に言い換えの情報を付け足す」ものとする。さらに、付け足す内容が、伝達の実質の情報を増やすものではなく、発話内容を評価するものがある。これをAd「言及内容に評価を付け足す」ものとする。このようなA類は全部で94例ある。

4－1．言及内容に付加情報を付け足す（Aa）

Aa類は、付け足すものが付加情報であるもので、全部で35例見られた。付加情報と元の発話との関係には、対比、累加、原因・理由の3種がある。

(12)その当時こう札幌と言うとですね＋((F ま)今は随分開拓されてますけども)＋(F えー)非常に野犬が多かったんですよ (S02M0191)

(13)こう両方耳があって両方で初めて＋((F まー)目もそうですけどね)＋一つになってセットになって(F まー)(F えー)役に立つということは本当に凄いことだなと (S00M0053)

(14)改札口のところで寝ていても駅員が何も怒らないというのと＋((F えーと)駅員が管理(F まー)(F その)(D い)深夜まで管理できないということなんでしょうけど)＋(F まー)(F えーと)朝になると駅員が起こす (S03M0194)

(12)では、話し手は、札幌について、当時は「非常に野犬が多かった」ことに対比させて、「今は随分開拓されてます」ということを付け足し、当時と今を対比して札幌の環境が変わったことを述べる。付け足す情報は後部と対比的なものである。(13)では、話し手は、「こう両方耳があって両方で初めて」「一つになってセットになって役に立つ」ということに、目も耳と同じように、「両方で一つになってセットになって役に立つ」という情報を付け足している。付け足す情報は発話全体の累加的なものである。(14)では、前部の「改札口のところで寝ていても駅員が何も怒らない」ことに、「駅員が深夜まで管理できない」という原因を付け足している。付け足す情報は前部の発話の原因・理由である。以上の(12) (13) (14)は、付け足す情報がなくても、聞き手の発話への理解に影響しないと考えられ、付加情報が付け足されたものといえる。

Aa 類は、話し手が、聞き手に発話をより詳しく理解させるために、当該発話にさらに関連する情報を付け足すものである。付け足す情報は、話し手にとって必要かもしれないが、聞き手にとってなくてもよい付属的なものである。

4－2. 言及内容に不足情報を付け足す(Ab)

Ab類は、付け足すものが不足情報であるもので、全部で14例ある。

(15)この時＋((F あのー)この鳥(?)コザクラインコっていうのはかなり(F ん)高い声でぴいという風に鳴くんですけれども)＋これは本当に思い切り鳴いてくれれば団地中に響くので (S02M0076)

(15)では、もし挿入部分の情報がないと、後部の「これは本当に思い切り鳴いてくれれば団地中に響くので」に対して、なぜ広い団地中に響くのかという疑問が生じると思われる。話し手は、それを考慮して「この鳥コザクラインコっていうのはかなり高い声でぴいという風に鳴くんです」という情報を付け足す。このような情報がないと、聞き手の発話への理解に影響するため、これは不足情報であるといえる。

Ab類は、話し手は、聞き手が発話内容に対して疑問や誤解を持たないように配慮して、理解するための不可欠な情報を付け足すものである。

4－3. 言及内容の言い換えの情報を付け足す(Ac)

Ac類は、言及内容を言い換えて説明するものであり、全部で33例ある。

(16)宗教が一つの公的な(F ま)いわゆる制度として(F あの)国家に受容されることにどうも(F あの)遠因＋((F ま)遠い原因と書きますが)(F あのー)(F ま)元々の(F あのー)原因となる出発点があるようです (S02M0068)

(16)では、話し手は、聞き手が前部の「遠因」が何であるかがよく分からないかもしれないと考慮して、「遠い原因」に言い換えている。付け足す情報は、当該内容と等価の言い換えである。

Ac類では、話し手は、あるものの言い方について聞き手が理解しにくいと考え、分かりやすいものに言い換えている。付け足す情報は、当該内容の言い換えである。

4－4. 言及内容に評価を付け足す(Ad)

Ad類は、発話内容を評価するものであり、全部で12例ある。

(17)芝生を敷いた広い公園＋((F ま)ここも本当にいいところです)＋で、それに隣接するように(F えー)松戸市の(F おー)資料館ですとか (S03M0317)

(17)では、話し手は、前部の「公園」に対して、「ここも本当にいいところです」と評価している。付け足す情報は、前部の内容について評価するものである。

Ad類では、話し手は、内容のある部分を評価する。付け足す情報は、実質の伝達情

報を増やさないもので、言及内容を評価するものである。

以上、A「言及内容を付け足す」ものについて詳しく見てきた。自発的な発話においては、話し手は伝達する内容を過不足なく用意して、それを総て話すという余裕はないのが普通である。つまり、伝達する話の内容にとって何が必要であるか、何が必要ではないか、また何を先に言い、何を後で言って、聞き手に分かりやすく伝えるかということを熟慮しているだけの時間はないということである。そして、発話中に、発話内容の理解にとって必要だと思いあたることがあり、その情報を即興的に付け足したのがA類ということになる。

5. 自身の発話に対してコメントする(B)

次に見られるのは、自身の発話に対してコメントするものである。これをB類と呼ぶ。B類を、発話のどのような面に対してコメントするかによって、Ba「言及の仕方についてコメントする」、Bb「言及の位置についてコメントする」、Bc「言及の根拠についてコメントする」、という3種に分ける。このようなB類は全部で39例ある。

5－1. 言及の仕方についてコメントする(Ba)

Ba類は、言及の仕方についてコメントするものであり、全部で13例ある。

(18)もし万が一のことがあっても＋(<u>(F まー)変な言い方ですけど</u>)＋(D お)男だし一年ぐらい許されるんじゃないかなっていうんで (S01M0225)

(18)では、話し手は、「もし万が一のことがあっても」「男だし一年ぐらい許されるんじゃないかな」という発話が聞き手にとって適切であるかどうかを考慮して、その発話の仕方がもしかすると聞き手にとって適切ではないのではないかと考えて、「変な言い方ですけど」とコメントしている。コメントは発話の言及の仕方についてのものである。

当該発話が聞き手にとって適切ではないものならば、聞き手に発話の内容をきちんと受け止めてもらえない可能性があると考えられる。Ba類は、話し手がその点に配慮して、発話の仕方についてコメントし、聞き手に発話を聞くための心理的な準備をしてもらうものである。

5－2. 言及の位置についてコメントする(Bb)

Bb類は、言及の位置についてコメントするものであり、全部で10例ある。

(19)それが何でかって考えると+((F あー)さっきも言ったんですけど)+東洋大学があるって (S03M0046)

(19)では、話し手は、「それが何でかって考えると」「東洋大学があるって」という発話に対して、「さっきも言った」とコメントし、当該発話は前文脈で発話したことがあることを聞き手に教えている。コメントは発話の言及の位置についてのものである。

一般に前文脈で発話した内容が再び発話されたら、聞き手にくどいと思われるかもしれない。Bb類は、話し手がそれに配慮して、当該発話をした位置をコメントし、今の発話に必要であるため、重複することを断るものである。あるいは、発話した位置についてコメントすることによって、聞き手に発話した内容を思い出してもらい、当該発話を早く理解できるよう促すものもあると考えられる。

5－3. 発話の言及の根拠をコメントする(Bc)

Bc類は、言及の根拠についてコメントするものであり、全部で16例ある。

(20)何で(F ま)映画化されるのかって言うと、わりとこの人のお話っていうのは+((F あのー)読んでみると分かるんですけども)+非常に映画化し易いように感じるんですね (S00M0075)

(20)では、話し手が「わりとこの人のお話っていうのは」「非常に映画し易いように感じる」発話ができるのは、映画の原作の本を「読んでみると分かる」という根拠を持っているためである。コメントは発話の言及の根拠についてである。

Bc類は、話し手が聞き手に発話内容を疑いなく受け入れてもらうために、発話内容の由来や参照物を根拠として提示するものである。

以上、B「自身の発話に対してコメントする」ものについて詳しく見てきた。話しことばにおいては、話し手は聞き手と対面するため、聞き手の聞く態度や気持ちに対する配慮をする必要がある。その配慮として、言及の仕方についてコメントして内容を受け入れてもらうための用意をしたり、発話の位置に言及して発話のくどさなどの態度に理解を求めたり、あるいは発話の根拠を示して発話の正しさを了解してもらったりする。このように、聞き手の違和感を排除しようとするものが、B類であろう。ただし、発話の位置への言及は、聞き手の思い起こしに役立つともいえるため、聞き手の内容理解に役立つ場合もあるだろう。

6. 言及内容を訂正する(C)

また、挿入構造に発話を訂正して挿入するものがある。それをC類と呼ぶ。C類は全部で13例ある。

(21)そいから、区役所と＋((D わ)区役所じゃない)＋(F その)役所がですね遠いとこにあるとかいうなことでですね ((10)再掲 S03M1133)

(21)は、話し手が、前部の「区役所」が間違っていたことに気づき、前部の誤った「区役所」を否定して訂正するものである。その訂正部分の「区役所じゃない」が挿入部分となる。

C類は、話し手が話しているうちに誤りに気づき、気づいたところですぐに訂正したために、その訂正内容がそのまま言語化され挿入されたものである。

話しことばにおいては、発話しているうちに誤りが生じることがあり、話し手は提示する情報の正確さを確保するために、それを訂正することになる。その訂正の手段の一つとして、誤った部分をすぐさま訂正するのがC類のようなものである。流暢に発話すること以上に情報の正確さに注意を払ったものといえる。

7. 発話中に自分に話しかける(D)

さらに、話し手が発話中に自分に話しかけることで発話がそれるものがある。それをD類と呼ぶ。D類は1例のみ見られた。

(22)うちにしては珍しく柴犬の＋(確か雑種ですね)＋雑種を飼うことになりました (S02M0198)

(22)では、話し手は、「柴犬の」の後、次に発話するものが適切かどうかに迷い、「確か雑種ですね」と自分に確認している。その確認の部分が言語化され、そのまま挟まれた。これが発話中に自分に話しかけるものである。

このような場合、話し手は、発話が妥当であるかどうかをモニタリングしつつ発話している。その中であやふやな内容に言及することになり、そこで自分の記憶をたどって確認している。その確認する部分がそのまま挿入部分となってあらわれたものがD類である。

話しことばにおいて、話し手は、その場ですぐ発話しないといけない状況であるために、発話の妥当性を考える時間が少ないといえるが、その中でも発話内容をモニタリングしている。上記のC類はモニタリングの中で誤りに気づいて修正したものであるが、このD類は、自分自身のモニタリングにおける確認をそのまま言語化したも

のである。これは、聞き手に対しての配慮という面は小さく、話し手自身の確認で、通常は言語化しないものであるため、例数は必ずしも多くない。そのため、今回の範囲では1例にとどまった。

8. 発話中に聞き手に話しかける(E)

最後に、話し手が発話中に聞き手に話しかけることで発話がそれるものがある。それをE類と呼ぶ。E類は全部で8例ある。

(23) ちゃんちゃん焼きというのはですね+((F えー)御存じの方もいらっしゃるかも(D し)と思いますが)+(F えーとですね)サケをですね(F えー)(F まー)大体はこう半身にしてですね、それを鉄板で焼いてですね (S01M0005)

(23)では、話し手は、発話の全体「ちゃんちゃん焼きというのは」「サケを大体はこう半身にしてそれを鉄板で焼く」ものであることを知っているかもしれない、と聞き手に話しかけている。これが発話中に聞き手に話しかけるものである。

E類は、聞き手が当該発話内容を聞いたことがある可能性を話し手が想定し、もし知っているのであればそれをわざわざ発話すると、内容がくどくなるということを考慮して、その可能性を承知しているということを示しているものである。

話しことばにおいては、話し手は聞き手と対面するため、聞き手の聞く態度や気持ちに対する配慮をする必要がある。その配慮として、知っていることを発話してくどくなるという発話態度に理解を求め、発話を最後まで聞いてもらうことを実現しようとする。そのようなものがE類であろう。ただし、知っているかどうかをたずねることは、聞き手の内容想起に結びつく可能性もあり、聞き手とのコミュニケーションに役立つ場合もあるだろう。

9. 機能分類と注釈部分との関係

以上、挿入構造の機能を詳しく分類してきた。挿入部分の機能とそれが注釈する部分には、一定の関係があると考えられるため、その関係を考察する。ここまで、挿入構造の種類と挿入部分がどこを注釈するかについて、個々の例で見てきたことから、ここでは具体的な例は割愛し、その例数のみを示す。すると、以下の表1と表2のようになる(「前」は挿入部分の前部、「後」は挿入部分の後部、「全」は挿入部分の前後の発話全体を指す)。本稿では、挿入構造の種類とそれが注釈する部分との間に顕著な傾向があるものに注目して考察する。

表1の中で、特に問題となるのはB類とC類である。B「自身の発話に対してコメントする」ものは、発話全体を注釈する。それは、具体的な発話の部分ではなく、発話の言及の仕方、位置や根拠のような発話の全体についてコメントをするためである。また、C「言及内容を訂正する」ものは、前部を注釈する。それは、その訂正が、直前に発話したものの即時的な訂正であるためである。

表1　A～E類と注釈する部分[3]

種類	注釈部分		
	前	後	全
A	41	36	17
B	0	0	39
C	13	0	0
D	0	1	0
E	2	2	4

また表2の中で、特に問題となるのはAc類とAd類である。Ac「言及内容に言い換えの情報を付け足す」ものは、前部を注釈することに偏る。それは、前部を別の表現で言い換えることが通例のためである。また、Ad「言及内容に評価を付け足す」ものは、前部を注釈することに偏るが、それは、前の発話した内容を評価することが多いためである。

表2　Aa～Ad類と注釈する部分

種類	注釈部分		
	前	後	全
Aa	3	25	7
Ab	0	5	9
Ac	30	3	0
Ad	8	3	1

以上のように、B類は発話全体を、C類は発話の前部を、Ac類は一般に発話の前部を、Ad類は一般に発話の前部を注釈する、という一定の関係があると思われる。

10. まとめと今後の課題

以上、挿入構造をその機能によって分類した。その結果は以下のようにある。

A「言及内容を付け足す」
B「自身の発話に対してコメントする」
C「言及内容を訂正する」
D「発話中に自分に話しかける」
E「発話中に聞き手に話しかける」

以上の挿入構造の分類のうち、A「言及内容を付け足す」もの、B「自身の発話に対してコメントする」ものは、舩橋(2011)の「内容」「メタ」「外界」タイプにそれぞれ相当する。そうすると、C類、D類、E類の挿入構造がここで新たに認められたことになる。さらに、高梨・丸山(2007)の「挟み込み型」「背景節型」の分類は、機能面からいえばここでのA類とB類にあたるが、ここでの分類は、それよりも精緻な機能分類がおこなわれたといえるだろう。

ここでは「けど・が」「文末」によってマークされる挿入構造にかぎって検討してき

たが、それ以外の末尾をもつ挿入構造も存在することから、今後はそのような挿入構造についても、機能分類をすすめていく必要があるだろう。また、舩橋(2011)のように、挿入構造の分類と挿入部末尾や挿入部分の前後にマーカーとして使われる言語形式の関係を考察していく必要もあるが、そのような検討は今後の課題としたい。

注

1. 模擬講演の約98%は、講演者が準備した原稿をもとにしつつ、その場で自発的に話しており、自発性が高いものである。
2. ここで言う文末表現とは、「分かりませんでした」「何故でしょうか」「印象ですね」など、文末であることが述語句によって文法的に明示される表現のことを指す。
3. A ～ Eの分類では、2つの分類にまたがるものがある。

(24)そこと後もう一つ(F その)社会学部がある(F ま)(A エム;M)大学っていう+((F まー)そこは実は(F その)先程お話ししたおじが通っていたところなんですけど)+そこのそこも(F まー)(D い)受けてみようというんで (S01M0225)

(24)は、B類とA類にまたがるものだと考える。挿入部分前半の「先程お話しした」に注目すると、話し手は当該発話の「社会学部がある(A エム;M)大学」を前文脈で発話したことにコメントしているため、Bb「発話への言及の位置をコメントする」ものに分類できる。一方、挿入部分後半の「おじが通っていたところなんですけど」に注目すると、話し手は前部の「社会学部がある(A エム;M)大学」を「おじが通っていたところなんですけど」に言い換えて説明しているため、Ac「言及内容に言い換えの情報を付け足す」ものに分類できる。本稿では、Bb類が主要であると考え、(24)をB類に分類した。本稿では、このように2つの分類にまたがるものについては、主要と考えられる方に着目して、各分類の例数を計算した。

調査資料

国立国語研究所コーパス開発センター編(2004)『日本語話し言葉コーパス』(第1刷 DVD-ROM)https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/csj/1st.html(2020年9月15日確認)

参考文献

岩崎勝一・大野剛(1999)「『文』再考―会話における『文』の特徴と日本語教育への提案」アラム佐々木幸子(編)『言語学と日本語教育―実用的言語理論の構築を目指して』くろしお出版 pp. 129-144

北野浩章(2007)「自然談話に見られる逸脱的な文の構築―試行的提示のための形式「…と言うか」「…ですか」など」串田秀也・定延利之・伝康晴(編)『シリーズ文と発話1 活動としての文と発話』ひつじ書房 pp. 91-121

高梨克也・丸山岳彦(2007)「自発的な話し言葉に見られる挿入構造と線状化問題」串田秀也・定延利之・伝康晴(編)『シリーズ文と発話3 時間の中の文と発話』ひつじ書房 pp. 67-102

林誠(2007)「「文」内におけるインターアクション―日本語助詞の相互行為上の役割をめぐって」串田秀也・定延利之・伝康晴(編)『シリーズ文と発話1 活動としての文と発話』ひつじ書房 pp. 1-27

舩橋瑞貴(2011)「注釈挿入の発話構造と言語形式―言語による発話構造の有標化―」日本語文法学会(編)『日本語文法』11-1くろしお出版 pp. 105-121

丸山岳彦・高梨克也・内元清貴(2004)「『日本語し言葉コーパス』に現れた挿入構造の分析」言語処理学会(編)『言語処理学会第10回年次大会 発表論文集』 pp. 448-451

丸山岳彦(2014)「『日本語話し言葉コーパス』に基づく挿入構造の機能的分析」日本語文法学会(編)『日本語文法』14-1 くろしお出版 pp. 88-104

－東北大学大学院生－